

記憶する建築

*Jude the Obscure*におけるクライストミンスターと複数の歴史

福原俊平

1. はじめに

昨今、絵画や演劇など、文学と他の芸術ジャンルとの交渉が大きな批評的関心の的となっている。しかし、文学と建築の交渉は文学と絵画のそれと同じくらい重要だというPeter Conradの指摘にもかかわらず(134)、文学と建築の交渉というテーマはまだ十分な注目を集めているようには思えない。文学と建築のアナロジーは、Ellen Eve Frankが*Literary Architecture*において「文学建築」という一つの伝統を発見しようとしているように、目立たないながらも確実に存在するテーマである。Frankが取り扱っている作家は、Walter Pater、Gerald Manley Hopkins、Marcel Proust、Henry Jamesの四人だけだが、関心をもって探してみれば、多くの作家に文学と建築というテーマを見出すことができる。ゴシック小説における建築、ロマン派における廃墟、ヴィクトリア朝小説における登場人物の性格を表す住居など、文学における建築の役割は大きい。¹

元建築家であるThomas Hardyもまた、文学と建築の相互作用に強い関心を示した作家である。一口に文学と建築の相互作用といっても、さまざまな切り口があるのだが、本論では「記憶」というテーマに絞って論じたい。² ハーディの作品には、しばしば建築と記憶との強い結びつきがみられる。とりわけ、*Jude the Obscure*の主要な舞台であるChristminsterは、長い歴史が特徴であり、都市の建物には住人たちの記憶が刻み込まれている。そして、記憶が刻まれた建物は、書物のように歴史を物語る。クライストミンスターの建築は、歴史を物語るテキストとなるのだが、その際に注意が必要なのは、その歴史の性質である。言うまでもないが、歴史は取捨選択を経て形成されるものであり、政治的な側面がある。*Jude the Obscure*の興味深い点は、性質の異なる複数の歴史が併置されていることにあり、本論では、クライストミンスターの建築の表象を分析し、テキストとしての建築が複

数の歴史の相克を物語っていると論じる。

2 . 書物としての建築

ハーディ小説においては、建築はしばしば「物語る」ものだとされる。³ Tristramは“Stories in Stones”において、次のように、ハーディの文学では、「石」には個人的あるいは社会的な歴史が結びついていると論じている。“Hardy’s response to stone, both in natural forms and as a presence in buildings, is closely related to his understanding of the history of societies and the fate of individuals.” (164) トリストラムは、ハーディの小説と詩の双方から豊富な引用を行い、石に込められた物語性を明らかにし、石と歴史との結びつきをみごとに示しているのだが、その結びつきの背後にある歴史的なコンテクストについては論じていない。そのため、*Jude the Obscure*を論じる前に、19世紀の文化的コンテクストにおける建築と書物というテーマについて概観してみたい。

Michael Brightが指摘しているように、建築と文学のアナロジーには長い伝統があるが(84-89)、19世紀において特徴的なのは、建築は「読む」ものだという認識である。*Notre-Dame de Paris* (1831)において、Victor Hugoは、“This will kill that, the book will kill the building.” (192)と語った。この衝撃的なことばは、この小説が描き出す15世紀のパリにおいて、印刷術が建築の地位を脅かし始めたことを表しているが、そこには建築が一種の書物だという認識がある。“[A]rchitecture was the great book of mankind, the principal expression of man at his different stages of development, whether as strength or as intelligence.” (193)とあるように、ユゴーにとって、建築は人類の歴史が記された書物であり、人々は建築を読むことによって、人類の歴史を学ぶことができるとされた。ハーディはこの建築的小説家の功績を鋭く見抜いていたのだろう。ユゴーの生誕百周年記念に、ある雑誌に次のような文を寄せている。“His [Hugo’s] memory must endure. His works are the cathedrals of literary architecture, his imagination adding greatness to the colossal and charm to the small.” (*Life and Work*, 334) ハーディはユゴーの作品を大聖堂に例え、“literary

architecture”と評する。このことは、ハーディが文学と建築という芸術ジャンルの親近性に関心があることを示している。⁴ そしてまた、文学建築は「記憶」の永続化と結び付けられている。

イギリスにおいても、建築を記憶のメディアとしてとらえる考え方は一般的であり、代表的な論客としてJohn Ruskinをあげることができる。ハーディがラスキンからさまざまな点で影響を受けていることはしばしば指摘されているところであるが、*The Seven Lamps of Architecture*における“The Lamp of Memory”の章では、建築にとって記憶は極めて重要な要素であるとされている。そして、ラスキンは大胆にも、建築は人間が生きるためではなく、記憶するために必要であると、次のように論じている。“We may live without her [architecture], and worship without her, but we cannot remember without her.” (*Seven Lamps*, 224)。そして、このような建築と歴史の強烈な結びつきを語る際に、ラスキンが持ち出すのは、文学と建築のアナロジーである。以下にあるように、文学と建築こそが忘却の魔の手から記憶を保護することができるかと論じている。

[There] are but two strong conquerors of the forgetfulness of men, Poetry and Architecture; and the latter in some sort includes the former, and is mightier in its reality: it is well to have, not only what men have thought and felt, but what their hands have handled, and their strength wrought, and their eyes beheld, all the days of their life. (*Seven Lamps*, 224)

建築は文学(Poetry)を含むというように、建築は書物のように歴史を物語る。しかも、建築には建築家や石工や人々の皮膚感覚が染み付いているという点で、建築は文学よりも優れているとされる。その優劣はともかくとして、ここで重要なのは、文学と建築がともにテキストとして認識されている点である。どちらも物語るテキストであるため、ラスキンが別のところで、“Thenceforward the criticism of the building is to be conducted precisely on the same principles as that of a book.” (*Stones of Venice*, 269)と論じているように、建築と文学は同じ基準で批評されるべきだということになる。

このような歴史的コンテクストを踏まえれば、ハーディが文学とのアナロジーを持ち出して建築について語るのも無理はない。1910年のある講演において、年老いたハーディは、郷土である Dorchester の変遷について語り、多くの歴史的価値のある建物が取り壊されたことを惜しむのだが、そこにも建築と文学のアナロジーが入り込んでいる。

Old All-Saints was, I believe, demolished because its buttresses projected too far into the pavement. What a reason for destroying a record of 500 years in stone! . . . Milton's well-known observation in his 'Areopagitica' 'Almost as well kill a good book' applies not a little to a good old building, which is not only a book but a unique manuscript that has no fellow. (*Life and Work*, 379-380)

ハーディには、建築を書物の比喩で語ることは、陳腐であるとする思えたのかもしれない。ハーディは書物の比喩を用いた上で、さらに「写本」(manuscript)の比喩を持ち出してくる。多くの同一物が存在する印刷物ではなく、写本としてとらえることによって、歴史的な建造物は取り替えることのできない唯一の存在だとされる。このようなレトリックの展開からは、単なる書物の比喩だけでは陳腐であるために、さらに写本の比喩を持ち出して、一ひねりを加えて表現しているのだと読み取ることができるだろう。

このように、建築を文学の比喩で語ることは一般的であり、建築はしばしば歴史を保存し、物語るものだと考えられた。しかし、ヴィクトリア朝時代において、建築が体現する歴史は、どのような歴史だとされたのだろうか。ヴィクトリア朝時代は記憶すること、あるいはメモレイトすることに多大な関心を払った時代だった。そして、その記憶とはナショナルな記憶であるとされている。⁵ ヴィクトリア朝時代においては、National Gallery (1824)、South Kensington complex (1857)、National Portrait Gallery (1859)をはじめとする博物館、美術館の開設ラッシュが起こった (Black, 4)。また、現在の *The Oxford English Dictionary* である *The New English Dictionary* (1884-1928) や *The Dictionary of National Biography* (1885-1900) などの大型の辞書類も編纂された。さらに、光永雅明が指摘す

るように、ロンドンの通りでは偉人たちの銅像が乱立した。これらの事実
は、極めて単純化すれば、ナショナルな歴史を記憶しようとする意思の表
れだといえるだろう。このような流れの中で、建築にも歴史の保存という
役割が課されることになる。Baucomによると、19世紀から20世紀初頭に
かけて、イギリスでは建築は国民の歴史を体現すると考えられていた。そ
のため、歴史的な建造物を訪れることは、「国民の歴史」を学ぶことにつな
がり、従って、ナショナル・アイデンティティを形成する効果があるとさ
れた(41-74)。つまり、建築が物語る歴史は、しばしばナショナルな歴史だ
とされたのである。それでは、ハーディにおいては、建築はどのような歴
史を物語っているのだろうか。

3 . Jude the Obscureにおける建築・文学・記憶

冒頭で述べたように、*Jude the Obscure*の主要な舞台であるクライストミ
ンスターは、長い伝統と歴史を有する都市である。Oxfordをモデルとする
この都市は、伝統ある大学を有し、大学は国を代表する偉人たちを輩出し
てきた。Jude Fawleyは少年時代に学者になる夢を抱くが、その夢は常にク
ライストミンスターという「場所」によって表象されていた。研究生生活の
具体的な魅力というよりは、場所がジュードの夢のシンボルとなる。ジュー
ドがついにクライストミンスターに足を踏み入れた時に、彼が再認識す
ることは、彼が少年時代から望んでいたことは、クライストミンスターに
住み、教会やホールといった歴史ある建造物の中を歩み、そのゲニウス・
ロキに触れることだったという事実である。“To get there and live there, to
move among the churches and halls and become imbued with the genius
loci, had seemed to his dreaming youth, as the spot shaped its charms to
him from its halo on the horizon, the obvious and ideal thing to do.” (136-
137)⁶ つまり、ジュードは場所に染み付いた歴史と交わることを望んでい
たのである。そして、実際に、“Like all new comers to a spot on which
the past is deeply graven he heard that past announcing itself with an
emphasis altogether unsuspected by, and even incredible to, the habitual
residents.” (109) とあるように、クライストミンスターは来訪者に対してそ
の歴史を強烈に語りかけ、ジュードは都市の歴史に心を奪われる。

このようなクライストミンスターの歴史は、「書物」の比喻で語られる。“The numberless architectural pages around him he read” (107)と記されているように、ジュードはページをめくるかのように、次々と建築を読み解いていく。そして、書物としての建築を読み解いていった結果、クライストミンスター大学のことをその学生よりも詳しく知るようになる。“The Christminster ‘sentiment,’ as it had been called, ate further and further into him; till he probably knew more about those buildings materially, artistically, and historically, than any one of their inmates.” (109) このように、ジュードは書物を読むかのように建築を読み、クライストミンスターのことを学ぶ。

だが、建築が書物であるといっても、具体的にはどのような書物なのだろうか。クライストミンスターを語る際に用いられる書物の比喻は多彩である。まず、ジュード少年が夕日の中に浮かび上がるクライストミンスターの神秘的な姿に憧れたように、その建物は、ある時は、文学的で美的な魅力を持つものとしてとらえられる。クライストミンスターは “that ecclesiastical romance in stone” (58)とあるように、ロマンスであるとされる。また、ジュードは石工の作業場で、新しい石材を見つめながら次のように感じる。

Here, with keen edges and smooth curves, were forms in the exact likeness of those he had seen abraded and time-eaten on the walls. These were the ideas in modern prose which the lichened colleges presented in old poetry. Even some of those antiques might have been prose when they were new. They had done nothing but wait, and had become poetical. How easy to the smallest building; how impossible to most men. (107-108)

ジュードによると、新しい石材は大学の建物と姿は同じでも「散文」的であり、時を経ることによってのみ「詩」になることができる。歴史が刻みつけられたクライストミンスターの建築は、美的な魅力溢れる詩へと変化するのである。この詩へと昇華した歴史は、クライストミンスターのもっとも理想化されたヴィジョンであるといえるだろう。

しかし、クライストミンスターという書物は、つねに賛美されているわけではない。理想化されたクライストミンスターも、ひとたびジュードがその熱狂からさめると、単なる古くさい崩れかけの都市へと変貌する。“What at night had been perfect and ideal was by day the more or less defective real. Cruelties, insults, had, he perceived, been inflicted on the aged erections.” (107) とあるように、美的な幻想を剥ぎ取ってしまえば、朽ちかけた都市という現実が剥き出しになる。そうすると、書物としてのクライストミンスターの建築も、“the rottenness of these historical documents” (107)と記され、なんら美的価値のない古ぼけた文献として認識される。また、このような大学の「建物」の老朽化は、大学のあり方や制度の疲弊を示すものとして語られる。この小説においては、とりわけスー・ブライドヘッドが厳しい大学批判を行っているが、ジュードもまた次のように、大学の建物の古さから学問の古さを連想する。“It seemed impossible that modern thought could house itself in such decrepit and superseded chambers.” (103) ジュードには建物の老朽化は、知的な次元における古臭さを表すように思えるのである。⁷

4 . 複数の歴史

ここまでみてきたように、ハーディはさまざまな比喻を用いて、歴史を物語る書物としてクライストミンスターを描いている。だが、その歴史とは、いったいどのような歴史なのだろうか。クライストミンスターの、とりわけ、「大学」の歴史は、一言でいえば、偉人やエリートたちの歴史である。このことはジュードが亡霊たちの行進を幻視する有名な場面からも読み取ることができる。亡霊たちの行進を構成するのは、文学史に燦然と名を残す詩人、オックスフォード運動に携わった宗教家、さらには政治家などの亡霊であり、国民的な偉人やエリートたちによって大学の歴史は築かれている(104)。亡霊たちの行進の場面は、直接的にはThomas Grayから影響を受けたものはあるが(Taylor, 457-458)、通りを埋める国民的な偉人たちの姿は、現実のヴィクトリア朝のロンドンにおいて通りを飾っていた偉人たちの銅像群を連想させるだろう。

ジュードは大学の「建物」に対して強い執着を示すが、その根底には、

この偉人たちの歴史に参入したいという願望がある。いかに大学から拒絶されようとも、ジュードは大学の「建物」に固執し続け、学生として中に入ることは不可能であっても、石工として老朽化した大学の修繕作業に携わる。そして、石工をやめざるを得なくなった後も、スーと共にクライストミンスター大学カーディナル・コレッジの模型を作り、ウェセックス大農業博覧会(The Great Wessex Agricultural Show)に出品する(306)。さらには、パン屋となっても、“Christminster cakes”と名づけた大学の形を模したパンを焼き、アラベラに““Still harping on Christminster even in his cakes!” laughed Arabella.”(323)と嘲笑される。大学の「建物」へのコミカルなまでの執着は、大学という書物の一ページになりたいという願望を表しているといえるだろう。言い換えると、ジュードには、クライストミンスターの歴史を「読む」だけでなく、「書く」という作業にも携わりたいという欲求がある。ジュードは、偉人たちの亡霊が大学の建物に染み付いているように、自身の死後もクライストミンスターに亡霊として居座りたいと願う。“But, Arabella, when I am dead, you’ll see my spirit flitting up and down here among these!”(Jude, 398)と語るように、ジュードの願いは、大学が体現する偉大な歴史と一体化することなのである。

しかし、ジュードの強い願望にも関わらず、結果としては、彼が「大学」の歴史に参入することはできず、大学の建築に「書く」ことはできない。だが、だからといって、ジュードがクライストミンスターという「都市」の歴史に、自身の存在を刻むことができないというわけではない。この小説において、そして本論においても、「クライストミンスター」という時、それはしばしば「大学」のことを指していた。だが、この学問の都は、大学だけで成り立っているわけではなく、大学とは無関係に暮らす大衆も存在する。名もなき大衆の歴史になれば、ジュードも参入できるかもしれない。

この小説では、大学の古臭さがしばしば攻撃されているが、その時に伴われるのが大学のガウン・ライフと大衆のタウン・ライフの対比である。大学は閉鎖的な場所とされ、大学の壁の内側では、エリートである学生たちが学び、外側でジュードのような労働者が生活をしている。たった一枚の壁によって、“only a thickness of wall divided them.”(339)とあるように、内部と外部が隔てられている。大学から拒絶され、大学の閉鎖性に絶望したジュードは、クライストミンスターの街並みを眺め、大学からその外へ

と視線を移していく。そして、貧民街もまたクライストミンスターという都市の重要な構成要素であることに気づく。

Jude's eye swept all the views in succession, meditatively, mournfully, yet sturdily. Those buildings and their associations and privileges were not for him. From the looming roof of the great library, into which he hardly ever had time to enter, his gaze travelled on to the varied spires, halls, gables, streets, chapels, gardens, quadrangles, which composed the *ensemble* of this unrivalled panorama. He saw that his destiny lay not with these, but among the manual toilers in the shabby purlieu which he himself occupied, unrecognized as part of the city at all by its visitors and panegyrists, yet without whose denizens the hard readers could not read nor the high thinkers live. (137)

パノラマを見るように、ジュードの視線は、大学の建築群を通過し、貧民街へと移動していく。彼の視線は、彼を拒んだ特権的な場所から、彼が現実には生きている場所へと移動する。この場面では、ガウン・ライフからタウン・ライフへと向かうジュードの関心の変化が、建築を用いてみごとに描かれているといえるだろう。そして、ジュードは、たとえ貧民街がクライストミンスターの一部として認知されることがないとしても、そこに住む労働者がいなければ、ガウン・ライフは成立し得ないのだと考える。言い換えれば、労働に精を出すジュードは、たとえ大学の中に入ることができなくとも、クライストミンスターという都市の一部なのである。

このようにガウン・ライフとタウン・ライフを対比した上で、ジュードは大学の「外」にも固有の歴史があることに気づく。大学が歴史を物語る書物であるのと同様に、庶民が暮らす貧民街もまた、歴史を物語る書物だとされる。そして、貧民街はタウン・ライフの歴史を物語るテキストとなる。

It [Crossway] had more history than the oldest college in the city. It was literally teeming, stratified, with the shades of human groups, who had met there for tragedy, comedy, farce; real enactments of the intensest

kind. At Fourways men had stood and talked of Napoleon, the loss of America, the execution of King Charles, the burning of the Martyrs, the Crusades, the Norman Conquest, possibly of the arrival of Caesar. Here the two sexes had met for loving, hating, coupling, parting; had waited, had suffered, for each other; had triumphed over each other; cursed each other in jealousy, blessed each other in forgiveness.

He began to see that the town life was a book of humanity infinitely more palpitating, varied, and compendious than the gown life. These struggling men and women before him were the reality of Christminster, though they knew little of Christ or Minster. That was one of the humours of things. The floating population of students and teachers, who did know both in a way, were not Christminster in a local sense at all. (139)

大衆の生活を見つめ続けた十字路は、大衆のたわいのないおしゃべりや、ありふれた男と女の愛憎劇などを記憶し、タウン・ライフの歴史を物語る「人間性の書物」(a book of humanity)となる。書物としての貧民街は、華々しい人物や事件を物語るのではなく、歴史上の大事件に翻弄されながらも、力強く生きた「大衆」の集合的な記憶を語る。言い換えれば、国家の歴史においては決して取り上げられることのない、大衆の生きられた歴史を物語るのである。そして、大学の歴史が、クライストミンスターの土地に根付いていない人間の歴史だとされる一方で、貧民街は土地に根付いたローカルな歴史を物語るとされる。この大学と貧民街の対比は、国を代表する人物を描くエリート主義的な歴史と名もなき大衆のローカルな歴史の相克としてとらえることができるだろう。“obscure”なジュードは、偉人たちの歴史に名を連ねることはできないが、大衆の歴史にならば、名もなき失敗者として記録されるであろう。

また、先ほどの場面では、貧民街が体現する歴史は、土地に根付いているという点が高く評価されていたのだが、建築とローカルな歴史との結びつきは、この小説の冒頭においても描かれており、このテキストの主要な関心の一つである。この小説はジュードが少年時代をすごした Marygreen という小さな村から始まるが、そこで描かれているのは小さな村の建築に

刻み込まれたローカルな歴史とその消滅である。

Old as it was, however, the well-shaft was probably the only relic of the local history that remained absolutely unchanged. Many of the thatched and dormered dwelling-houses had been pulled down of late years, and many trees felled on the green. Above all, the original church . . . had been taken down . . . In place of it a tall new building of modern Gothic design, unfamiliar to English eyes, had been erected on a new piece of ground by a certain obliterator of historic records who had run down from London and back in a day. The site whereon so long had stood the ancient temple to the Christian divinities was not even recorded on the green and level grass-plot that had immemorially been the churchyard, the obliterated graves being commemorated by eighteenpenny cast-iron crosses warranted to last five years. (35-36)

語り手は、古い住宅や教会の解体とともに、村のローカルな歴史が失われたことを嘆く。そして、ロンドンという中心部の人間が、日帰りで地方の歴史を消し去ったことに対して怒る。これは、歴史が「書き換え」られることに対する反発だといえるだろう。失われていく歴史を悲しみと怒りを込めて描いているのだが、そうすることによって、共同体の土着の文化が抹消され、ロンドンのヘゲモニーの下に文化が均質化されることに対して異議を申し立てている。

ここにおいて、大学の歴史と貧民街の歴史の対比に加えて（あるいはその別ヴァージョンとして）、ロンドンと地方の対比という問題をみることができるのだが、これらの対立関係は、歴史の複数性を示しているといえるだろう。歴史の複数性を示すことは、中心的な歴史が唯一の歴史ではないという事実を示す行為でもある。ハーディは複数の歴史の相克を描くことによって、注目を集めることがほとんどない周縁的な歴史の存在をアピールしたといえるだろう。

5 . 結 論

本論では、書物のメタファーを中心として、*Jude the Obscure*における建築の表象を分析することによって、さまざまなレベルにおける対立の力学を見出してきた。書物としてのクライストミンスター大学は、時には美的な詩として賛美されるが、かび臭い文献として批判される時もある。そして、賛否両論のある大学そのものも、貧民街と対立関係におかれ、大学が物語る偉人やエリートたちの歴史は、貧民街が物語る名もなき大衆の歴史によって異議を申し立てられる。また、首都であるロンドンと地方のメアリーグリーンのローカルな歴史との間にも対立関係がみられる。これら重層的な対立関係は、歴史の複数性を強調し、これらの相克を通して、建築に刻まれた歴史は、決して固定したものではないということが明らかにされている。ジュードは建築を「読む」だけでなく、「書く」行為にも携わろうとする。結果としては、ジュードの行為は失敗に終わる。また、メアリーグリーンのローカルな歴史も消滅する運命にある。だが、書く行為や、書き換えの問題を取り扱うことによって、*Jude the Obscure*における建築は、読まれるだけの固定されたテキストではなくなり、複数の歴史が混在し闘争する、生成過程のテキストとなるのである。

* 本稿は日本ヴィクトリア朝文化研究学会第3回大会（2003年11月22日、於駒澤大学）における研究発表の原稿に加筆・修正を加えたものである。

註

1. ロマン派における建築については、Hamonが、フランスのロマン派についてではあるが、建築を「読む」という観点から論じており、本論との関連において特に興味深い(53-69)。Charles Dickensの小説に関しては、建物は住人と一体化し、住人の性質を表していると Peter Conradが指摘している(138)。Hardy小説においても、建物により住人を表す手法はしばしば見られ、とりわけ*A Laodicean*と*The Mayor of Casterbridge*において顕著である。この点については、J. B. Bullen, 118-168、Peter Casagrande, 85-187の論が特に興味深い。
2. 他の観点としては、例えば、ディケンズ的な建築による登場人物の性格の表現や、小説構造としてのアーキテクトニクスなどがあげられるだろう。
3. もちろん、Jonathan Wikeが指摘するように、ハーディは世界そのものをテキストとしてとらえており、物語るのは建築だけではない。とりわけ詩におい

て顕著なように、記憶と結びついた風景も雄弁に物語る。また、人間の顔も、遺伝という観点から、しばしば重要なテキスト内部のテキストとなっている。本論との関連でいえば、玉井暲がLittle Father Timeの死に顔に注目し、自分だけでなく両親の歴史さえも物語るものとして描かれていると論じているが(49-51)、歴史が刻まれた顔というものは、この小説における建築の役割と類似しているといえるだろう。

4. 付け加えると、ハーディ自身もProustから建築的な小説家として評価されている。プルーストは、『囚われの女』において、ハーディ小説に「石工の幾何学」を見出し、ハーディの小説群を建築群になぞらえている(524-525)。
5. この点についてはPhilip Dodd、Eric Hobsbawmを参考にした。付け加えると、歴史(近代史)のコースがオックスブリッジに導入されたのも19世紀中葉のことである。中村勝美によると、学問としての歴史は、オックスブリッジにおいてはジェントルマンの教養として教えられ、そして、歴史教育は世紀転換期までには、大衆の初等教育においてもなされるようになり、愛国心を刷り込む装置となった。この事実は、本論のテーマである歴史の政治性を表しているだろう。
6. 引用はThe New Wessex Editionから行い、以降では括弧内にページ番号のみを記す。
7. この小説における大学批判は、19世紀において、クライストミンスターモデルであるオックスフォード大学に対して浴びせられた批判を反映したものである。とりわけ、より広い層に門戸を開くべきだという「国民化」への要求は、ジュードの姿から透けて見えるだろう。19世紀のオックスフォード大学に対する批判とその改革については、安原義仁の論を参照。

引用文献

- Baucom, Ian. *Out of Place: Englishness, Empire, and the Locations of Identity*. Princeton: Princeton UP, 1999.
- Black, Barbara J. *On Exhibit: Victorians and their Museums*. Charlottesville: UP of Virginia, 2000.
- Bright, Michael. *Cities built to music: Aesthetic theories of the Victorian Gothic Revival*. Columbus: Ohio State UP, 1984.
- Bullen, J. B. *The Expressive Eye: Fiction and Perception in the Work of Thomas Hardy*. Oxford: Clarendon Press, 1986.
- Casagrande, Peter J. *Unity in Hardy's Novels: 'Repetitive Symmetries'*. Lawrence: The

- Regent Press of Kansas, 1982.
- Conrad, Peter. *The Victorian Treasure-House*. London: Collins, 1973.
- Dodd, Philip. "Englishness and the National Culture." *Englishness: Politics and Culture 1880-1920*. Eds. Robert Colls and Philip Dodd. London: Croom Helm, 1986. 1-28.
- Frank, Ellen Eve. *Literary Architecture: Essays toward a Tradition*. Berkeley: U of California P, 1979.
- Hamon, Philippe. *Expositions: Literature and Architecture in Nineteenth-Century France*. Trans. Katia Saison-Frank and Lisa Maguire. Berkeley: U of California P, 1992.
- Hardy, Thomas. *Jude the Obscure*. London: Macmillan, 1974.
- . *The Life and Work of Thomas Hardy*. London: Macmillan, 1984.
- Hobsbawm, Eric, and Terence Ranger. *The Invention of Tradition*. Cambridge: Cambridge UP, 1983.
- Hugo, Victor. *Notre-Dame de Paris*. Trans. Alban Krailsheimer. Oxford World's Classics. New York: Oxford UP, 1999.
- マルセル・ブルースト 『囚われの女』(井上究一郎訳、筑摩書房、1987年)
- Ruskin, John. *The Seven Lamps of Architecture*. Eds. E. T. Cook and Alexander Wedderburn. *The Works of John Ruskin* VIII. London: George Allen, 1903.
- . *The Stones of Venice II: The Sea-Stories*. Eds. E. T. Cook and Alexander Wedderburn. *The Works of John Ruskin* X. London: George Allen, 1904.
- Taylor, Dennis. "Thomas Hardy and Thomas Gray: The Poet's Currency." *ELH* 65 (1998): 451-477.
- Tristram, Philippa. "Stories in Stones." *The Novels of Thomas Hardy*. Ed. Anne Smith. London: Vision Press, 1979. 145-168.
- Wike, Jonathan. "The World as Text in Hardy's Fiction." *Nineteenth-Century Literature* Vol. 47 (March, 1993): 455-471.
- 玉井暉 「リトル・ファーザー・タイムと世紀末文学 『日陰者ジュード』論」
『トマス・ハーディと世紀末』(森松健介・玉井暉・土岐恒二・井出弘之、英宝社、1999年) pp.47 - 83。
- 中村勝美 「ジェントルマンの教養とシティズンシップ イングランドの国民形成と歴史教育」『ネイションとナショナリズムの教育社会史』(望田幸男、橋本伸也編、昭和堂、2004年) pp. 225-254。
- 光永雅明 「銅像の貧困 十九 - 二十世紀転換期ロンドンにおける偉人銅像の設立と受容」『記憶のかたち コメモレイションの文化史』(阿部安成、小関隆、見市雅俊、光永雅明、森村敏己編、柏書房、1999年) pp. 81-118。
- 安原義仁 「近代オックスフォード大学の教育と文化 装置とエートス」『近

代ヨーロッパの探求 エリート教育』(橋本伸也、藤井泰、渡辺和行、進藤修一、安原義仁著、ミネルヴァ書房、2001年) pp. 201-240。

(東京都立大学大学院博士課程)

between the publication of *Basil* and the writing of *The Woman in White* corresponds to the time in which Collins contributed a number of articles as a staff member of *Household Words*. One can say that his writing experiences under Dickens' eyes resulted in deliberate modification of 'sensationalism' in *The Woman in White* for the bourgeois taste.

The sensation novel of the 1860's was thus brought about, not like in *Basil*, by adopting 'sensationalism' typical of cheap journals, but as the moderately entertaining element of *The Woman in White*.

“Architecture and Memory in *Jude the Obscure* :
Christminster and its histories.”

Shumpei FUKUHARA

In the nineteenth century, the analogy between literature and architecture was prominent: architecture was regarded as a book which narrates history. This idea was shared with Thomas Hardy, and in *Jude the Obscure* there are ample examples of literary exploitation of architecture. In this paper, I “read” architecture in the novel and examine the histories the buildings narrate.

In *Jude the Obscure*, interesting is the fact that a certain kind of conflict is implied in the representation of architecture as a book. The edifices in Christminster are sometimes idealized and described with metaphors of “romance” and “poetry”; yet, in a more somber mood, the buildings look like decaying historical documents. This contrast corresponds to the text's ambivalence toward Christminster University, which is at once time-

honoured and obsolete. This ambivalence will be endorsed if we pay attention to the buildings of the slum, which embodies the collective memory of the anonymous masses. While the university embodies an elitist history, the slum is described as “the book of humanity.” Through the analysis of the representation of the university and the slum, this paper argues that the architecture of Christminster is the text where plural histories are at odds.